

是別人にあらず主人龍次

且飲び忙しく上座は押直

や〜知〜空向るよと〜や。さるで懐くもあ、も、

業よいのゑるが身といひ袖助い

場を短ん夏〜うみりぞひよる

今日〜も街の風流ひよかろ夏

糸〜なんと因ひ〜呼へ子四を

恙〜死ひ何と〜弄く老の私ひ

龍次郎も最面う〜何といへ

源清海い更は氣もつ〜ず龍次郎君の斯く安

〜長崎大坂〜

〜も只今〜

〜も、も、

〜毒〜

三月日〜

〜備や〜

〜

〜

〜

〜

定めく娘は糸もつ〜がるる〜。世も昔流んと偽〜るものなり。
胸の痛も胸を痛や〜こそ易う〜ねさるい〜は三の形のる死縛ハ言
ののるまで。一太虚を〜く〜弟大実を〜く〜から針む〜ある
夏も捧心〜よいのハ世のららひ曲輪ふ〜情死せ〜契情ふても
有〜やと〜問る〜つらさふ〜三箇ハ胸も〜たりさ〜く憂〜ひ子四清ハ
涙を〜らひ。源清海袖ぬよ〜向ひ言〜こ〜止む〜へ〜縛る〜ねバ縛の
子細白地は物落〜と〜る〜う〜い〜ふも街の流〜ふ〜遠〜山〜糸〜ど
こと推ハ〜い〜人〜と情死〜と相果〜り故ハ驪山逸月寺〜のい
蘭若〜は兩箇が死骸を埋〜葬〜比婆塚〜と名づけ〜く赤の世〜も
煙〜死〜よ〜ま〜する〜貞女の境曇〜ぬ採〜を世の人〜ふ〜あ〜せんとせ〜縛



學まなぶき。小こ宗すねハ推おしへと清きよ死しせくと世よふうといふも。敵たかよむとあま
さる。深ふかきととああのさす。死しみのと泪なみだと俱ともは物もの結むすまハ源げん流りゅう袖そでハ
悲かな歎なげの因ゆゑ又またむせびまら。源げん次じ郎らう子こ四よ流りゅうが厚あつ情じやうと感あはれあける。子こ四
流りゅう再またび源げん流りゅう袖そで又また向むかひのやう。其その時とき直ただは源げん文ぶん太たとあある
べり。一ひとまじで。小こ宗すねの情じやうあま痛いた者もの四よ郎らうの刀やいばと氷こおり姿すがた鏡かがみ二ふた種しゆの
室むろあまび源げん次じ郎らう君きみの心こころは入いりも全ぜんく小こ宗すねが動うご切きるまじ。
暫しばくがルど源げん文ぶん太たの命いのちを取とり。こごとその恨うらみのせ。彼かれれ
何なに国くにへと逃にげ笑わらひ。まじ。遠とほくも去さす。母ははのけ。辺へは併ひと何なにもひり。
眩くらま告つる者ものあま。今いまあハ入い當あたり。次つぎ中なか仇あだ討うちとぐ。と諸もろととひり
と訊きね。小こ宗すねどの。緯いを結むすり。且かつハ袖そで又また病びやう氣きと。妨さまたひ。暫しばくが

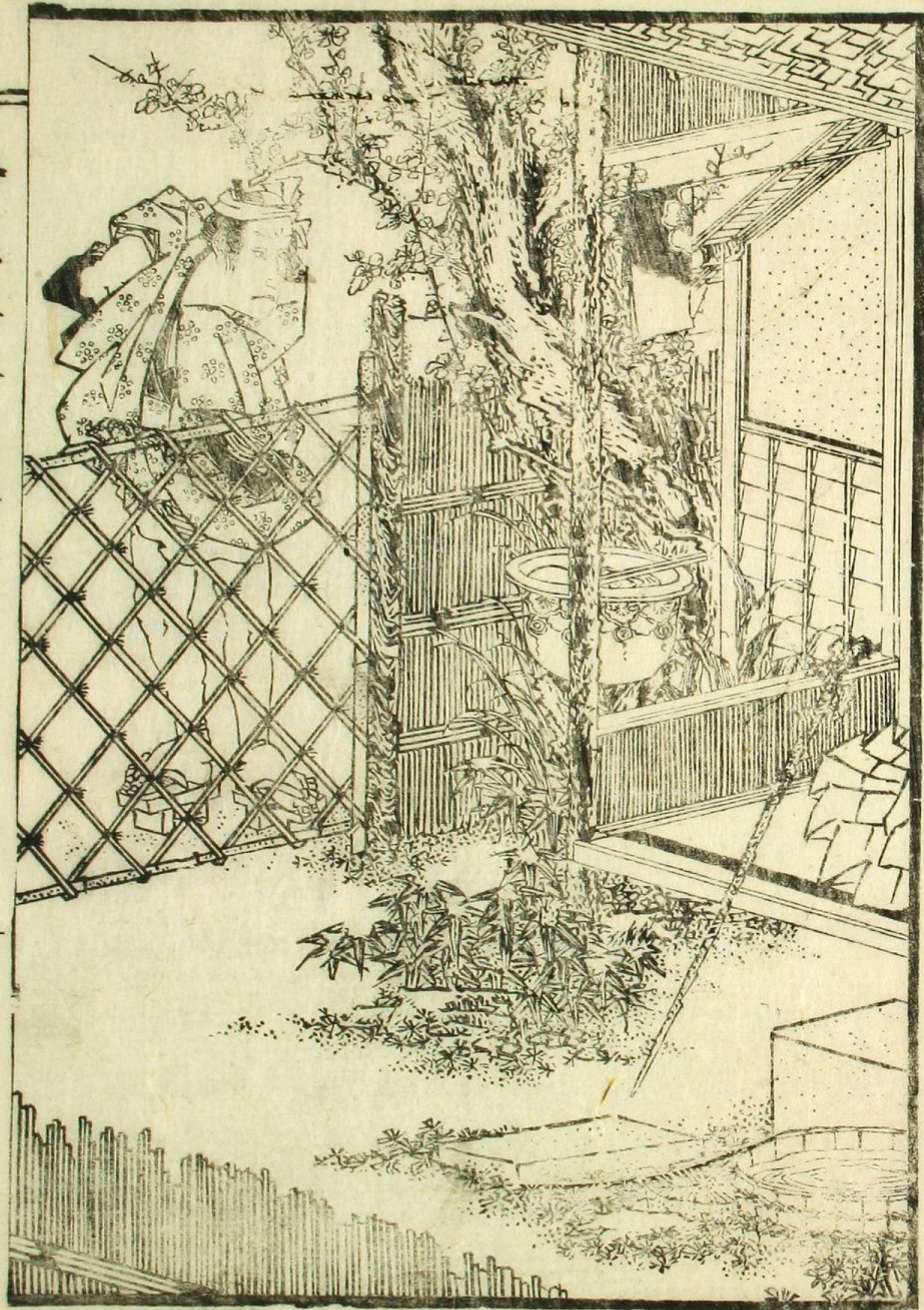
間まは。好このよ。ああの。敵たかの。心こころを。と。う。ね。と。山やま梅うめの。う。と。ま。り。と。
子こ細こづつ。ああの。告つげて。頼たのみ。け。ま。源げん流りゅうハ。一ひと様さまも。ああの。何なにが
借か袖そで又またと。ひ。ひ。心こころを。と。う。ね。と。一ひと方かたも。ぬ。れ。ま。あ。づ。う。唐から染ぞめの。血ち
蒙かぶの。心こころを。と。う。ね。と。ま。ま。は。家いへは。止とどり。永ながく。敵たかの。心こころを。と。う。ね。と。ま。
う。と。い。と。信まことや。う。皆みな待まちま。源げん次じ郎らう子こ四よ流りゅうま。輝あかりハ。大おほき。飲のみひ
こ。ま。ま。の。一ひとと。源げん流りゅうが。方かたは。あ。ま。り。と。日ひ毎ごとも。表あはれ。と。つ。み。粧まと。か。へ。
蒙かぶ文ぶん太たが。心こころを。と。う。ね。と。ま。ま。は。家いへは。止とどり。永ながく。敵たかの。心こころを。と。う。ね。と。ま。
其その後のちハ。康やすへ。も。信まことや。心こころを。と。う。ね。と。ま。ま。は。家いへは。止とどり。永ながく。敵たかの。心こころを。と。う。ね。と。ま。
源げん次じ郎らう本もとハ。何なに国くにハ。往ゆけ。辺への。心こころを。と。う。ね。と。ま。ま。は。家いへは。止とどり。永ながく。敵たかの。心こころを。と。う。ね。と。ま。
我われ形かたちを。と。う。ね。と。ま。ま。は。家いへは。止とどり。永ながく。敵たかの。心こころを。と。う。ね。と。ま。ま。は。家いへは。止とどり。永ながく。敵たかの。心こころを。と。う。ね。と。ま。

後文大隠は居る便りよは夏もあはれ彼地はあはれん身もくこし君
 小八尚も當国は公さつけくさぐさあひその内小八袖は病ひも本服
 までけはる中へ後袖はと同居するしひは静は緒国を尋ねるはく
 育つ六本腰ととけるおねとりあはらしく我曲守のうもはらしく
 此身は静み木も草もひとつけく必は静かす一もまは静れす
 静れすおとこ一もあはらしくすと最とあはれく言残し子四清は静れす
 斯くて曲守よは静次郎袖は小梅源清は日毎よ子四清は安
 とまも居る折しも秋の初中と何とくも静れすよりのふまは静る
 又妾は静が産のひもあはれ似もやうび前よは隅田の流は清く雨情
 ひもくくもるは僻地もは寂莫とてその妻も夕暮よ小梅は

龍次郎は向ひ今宵は四兄君浦右エ門さまのひ連夜ひたすりのま
 向と持佛の扉むくひくは香花はゆる折もお表の方は高是
 八清国の法場へ六十六部の大系妙典を納めおと大願を發起
 遠道と着縁もする衆門よはひが今宵の病を取ひ損ひお静れす及
 びもる静れ何事度心屋の間よるりと一夜を明させぬまは
 こまもく人とも功德はるりと静れ山崎は静次郎をかへり静れ
 君も静れおのや四兄君の連夜は静れ暮しくるは静れ清の
 病も静れひもるを静れよせんも静れはは静れまは静れ一夜の静れ
 静れまは静れ静れ静れ子細はあはれ源清どのの曲守も静れ袖
 ぬごの静れあはらしと静れられて袖は何れも静れ親父どのが居ら静れ

一ト間入りのぬかては梅の納ちを知らしめるのよや今日の源も
も例ふらぬ飯ののちとてはあま子四三番も今日明日の善悪も
よ一食の飯のめがけ日限のふらしまは後ののちたよりつらひの
みやびよろる夏のまごつかる時の憂を拂ふも常酒とりぬの
まの夏あつて幸ひ後僧も泊りぬひつらつと走の村れ酒肆へ
りてふれどは袖交どのと只一人細くもあらんとまご尚守り
とらひろけくは梅の忙がごとく走のまごぬ路は二人の顔とありを
りけの戀とあちせ目知ななへ錦とかざり本領安堵する夏ぞ
倚り我く運拙く裳文太がふみ返り射あせしころとさひのくても
裳文太が病をさる夏もあつが我のいま埋木の花は雲もたの意の上

冥土の凡へ何とろいん。只一刻も迷く裳文太を赤き二種渚とも本
貫へ持系してふらび唐琴の家を起したまの哉とあまひを
揺めきてま去る体は薩摩郎の何のうやあとのびあがりて刃であれ
見るもいふせだ一箇の痲病を車にまかせくは葉の片の辺りよりま
たるあまごどありけり。渡次郎のこまじきとてある法接しや病世あ
あくしてうら業病は苦しむを食さど後あくやあらんずらん
△宵のあつても亡凡の思日のまじびなごりの影とては三の飯を器よ
入まへ外面へ持出つのを食よむひ今宵は我志日のまじび
まのくまると子んとする顔とを食いつくぐも極め双眼は泪と



林檎屋の御主人

浮舟の舟ハ唐琴龍次郎ぬきよしてその頃麻を能回志のひし
 権ハと替名を志のひし人よあきまむといひしは龍次郎ハ大よ終り
 委しきりを知る人ハつむまらうまし奈何ふも龍次郎といひし
 みるが去る頃ハ子細よく推ハと察察しつりしがお徳ハ何人よ
 考てかろ委しきりを知る人のや彼の片田山ハ饑くる人のこひ
 ろるその俗性を破まりと結と向ハを喰ハいふく両眼をま
 ださ其や天網焔く燃ふと漏らさびと母らん汝は知る人のハ
 汝はうる因果報の理延べきふあらず柿も山子ハ月ガ仇と結
 らひるハ旧鳥袋文太といひしものうりとは破く響く龍次郎袋文太
 猶も落付くおく自ら名事ハ来る人ハ追べき志業ハあらず考て

小紫が考すも破のひつらんが我父も原ある武士ふし官平次
 左のといつて者有りしが我ハ初めハて父母ハ別は法をさる
 よハ其中ハ不図信別ふくハ月ハ見る浦右エ門どの令室棧の
 之蜜通 妾藤花を殺し其後笛吹峠ハて兄浦右のどのを切
 害みしそ置り又諸国を編履し一男麻山の緘まところり或ハ
 株桐柄組の使者とるの困心と急急して曲輪を徘徊一金浪紋
 室を揺め人の命を屠つるの幾人とりハ敷をまきす爰は油く
 その報ひ来りて見ゆハよく世ハも稀なる業病をうけく袋文太
 とも困心と見ゆる人ハたは度我らハ疾疾しく斯てハ世ハ存
 命ハひるけしむしと爰ハるね来りハ月ガくまらうとて死する

探さえと他国まで家よあわぬうへ。因者とのまへ終つて肉
ふ小梅と蹇の下部なるるは維新の世にゆくと故を返す
ひ一鎬者四郎をも奪ひ返す。一ツは妹小宗ハ。汝うもたひこれハ
敵討ひ五分くまるとあくとふ。咄言まる洞小勝次郎ハ大は感の
おのこ長文太先達く五川あて歩くうへと。小宗も感不感して。元の
せしと。又のや我をくまると。氷姿境とくまると。中より敵をく
ひくあつふ。まゝまゝ上つくと。揚負せよと。刀の柄を扱ひつり。既も夜と
まる所を。是のて下と。激しく。一ツ。蟠柳う。芥と。やい。見。此。長文太を討
んるんども。虎の怒を。扱ひ。も。同前。ち。と。ま。ま。と。あ。み。倒。せ。ハ。急。急
とあせまど。勝次郎の。こ。強。氣。の。長。文。太。も。あ。ら。ぶ。へ。き。既。も。あ。ら。ぶ。死

その所へ折克戻る梅の子四三。清。其。昏。る。ま。ど。秋。の。夜。の。く。ま。る。死。月。を。燈
ま。我。家。は。逆。づ。き。遙。う。ふ。日。ま。は。何。う。ふ。ま。は。日。う。ね。と。西。首。あ。ら。と。ひ
居るありさる。梅。と。る。死。と。を。あ。り。つ。死。と。見。ま。は。敵。長。文。太。が。勝。次。郎
を。引。捕。ら。へ。既。お。う。う。と。見。る。お。松。子。四。三。清。斯。と。見。る。う。り。も。死
か。つ。く。長。文。太。を。引。の。け。つ。勝。次。郎。を。後。より。と。ひ。死。と。や。死。ん。宗
ひ。実。の。名。ハ。旧。者。長。文。太。と。入。の。敵。揚。負。せ。よ。と。結。末。ま。は。長。文。太。と
縁。と。子。四。三。清。が。身。体。ハ。ま。つ。と。る。ま。ま。ま。は。逃。ん。と。す。ま。ど。も。逃。さ。下。と。
う。ね。と。准。備。や。あ。り。け。ん。竹。杖。と。志。こ。み。一。刀。を。扱。を。み。一。未。塵。ま。る
ま。と。切。う。ま。は。ん。の。う。と。受。流。し。暫。い。ど。み。戦。の。太。刀。音。袖。ぬ。ハ
何。う。の。ま。と。蹇。ま。は。ら。口。口。へ。い。で。日。ま。は。子。四。三。清。と。勝。次。郎。が。敵。討。を

毎七巻八巻九巻十巻



梅乃三入後三



梅乃三入後三

十七

大さくんとてまらうんいさよる。間のうちら多高く。お入まらうんいさ
 養育もくもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 かのひ後終のよふまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 の家後唐の浦をまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 い後海とよむに去るは大明(唐)の浦をまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 渡りてと浦をまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 次まのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 災どうもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 おもあまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 べし猶又子四をまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも

て養育の子のまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 先達とく子四をまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 小梅が身長言有姿をまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 まのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 殺せし長言送言まのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 て存命ありや招魂の法をまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 ふあありとるまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 禪師の法をまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも
 まのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふもまのけいけいふも

